jtk2003005

ロバート・ワイルドと王政復古

高野 美千代
国際教養科

Robert Wilde and the Restoration

Michiyo TAKANO
Department of International Studies

Key Words：十七世紀英詩 清教徒　王政復古
seventeenth-century English poetry, puritan, the Restoration

Outline

Robert Wilde (1609-1679) is a seventeenth-century English poet who has been mostly ignored since the publication of his volume of poems in late 19th century. This study aims to consider his poems written around 1660 and to discover the significance in the light of their historical and social context.

はじめに

19世紀から20世紀半ばにかけては形而上詩人をはじめ多くの17世紀イギリス詩人が批評家たちによって再評価されてきた。その一方で、17世紀当時には大変な人気を博したものの、いまだ忘れられている詩人もいる。その一例が清教徒詩人のロバート・ワイルド(Robert Wilde[1], 1609-1679)である。彼は王政復古を迎える頃から積極的に執筆活動を行い、当時には多くの読者を得ていたという。この小論ではワイルドの1780年版詩集の中から特に王政復古との関わりのある作品を取り上げ、作品の意義を探りたい。

1. 王政復古まで

ロバート・ワイルドは年代的にはちょうど同じ清教徒であり、詩人・政治家のジョン・ミルトン(John Milton, 1608-1674)とほぼ同時期を生きたことになる。出身はハンティンドンシャのセントアイヴズ(St. Ives)で、父親は靴屋であった。[2] リトル・ギディング(Little Gidding) でも知られるハンティンドンシャは宗教色の濃い地域であり、中でも特にセントアイヴズはピューリタン的思考の強い場所である。セントアイヴズといえばオリヴァー・クロムウェル(Oliver Cromwell) ゆかりの地でもあった。記録をたどればワイルドとクロムウェルは一時、同じ教会に通っていたことになる。

アカデミックな背景としては、7年間地元の学校に通った後、1630年から32年ごろケンブリッジ大学セントジョンズカレッジに入学している。その時はサイザー、すなわち他の学生の下僕をつとめる義務付きの給費生(もしくは特待免費生)という身分であった。1634年にはスカラー(奨学生)となり、36年にBA、39年にMA、そして1642年11月1日にオックスフォード大学のBD、60年11月9日にDDを取得している。

ワイルドは1646年7月、下院の推薦によりノースハンプトンシャのアインホウ(Aynhoe)の聖職禄を得た。若い頃のワイルドの思考、心情についての詳細な記録はないが、ケンブリッジ大学を出た頃に書いたバラッドから当時の様子を推察することができる。“Alas, poor scholar! whither wilt thou go?”「あわれな学生よ、あなたは何処へ行くのか」というタイトルのそのバラッドには、若き日の詩人の悩みを示唆するような内容が含まれている。DNBによれば、1641年頃の作品とされる。その頃はワイルドがケンブリッジ大学の卒業(1639年)から、オックスフォードの神学の学位を取るまで(1642年)の中間の時期にあたるが、作品からは、詩人がちょうどケンブリッジ大学を離れる時期だということがうかがえる。

このバラッドは8連、各13行から構成される。最終連を除くそれぞれの連の最終行は、“Alas, poor scholar, whither wilt thou go?”というリフレインになっている。作品の冒頭で詩人は穏やかに自分の現在の状況を説明している。学生として、多少の野心や上昇志向があったことを隠し立てもせずに認めている。ただ、17世紀詩人のジョン・ダンやジョージ・ハーバートも学生時代には社会的に活躍しよう出世しようという野心を少なからず持っていたが、ワイルドの場合は家が裕福でも名門でもなかったために、まずは大学において他人とのつながりを確保したい、他人に認められたい、という気持ちが強かったようである。その願いも空しく大学を離れることになった詩人は、まず第1連では、自分が学生生活を送って、教養、学識は得たものの、古典に強くなっても金は稼げない、と嘆いている。第2連ではケンブリッジを離れる今、振り返ると自分の望み通りに活躍はできなかったと言う。第3、第4連では具体的に、屈辱的とも思える経験をし、出世を狙ったもののうまくいかなかったことを書いている。

I have bowed, I have bended,
And all in hope
One day to be befriended
.....
At great preferment I aimed,
Witness my silk;
But now my hopes are maimed: [3]

周囲に頭を垂れ、保護を得ようと願い、大変な出世を望んでいたのだが、今や自分の夢は絶たれた、と詩人はありのままに学生の失望感を記している。また、ある田舎の村へ行くというエピソードになると、以下のような説明を加える。

Into some country village
Now I must go,
Where neither tithe nor tillage
The greedy patron
And parched matron
Swear to the Church they owe.
Yet if I can preach,
And pray too on a sudden,
And confute the Pope
At adventure, without studying,
Then ten pounds a year,
Besides a Sunday pudding.

「ある田舎の村」(some country village)へと行かねばならないが、人々は洗練されてもいないし、自分も心底好んでする仕事ではない。ただ、説教や祈りをし、カトリックの批判でもしていれば、一年に10ポンドの安定した収入を得、食事の心配も要らない。つまり、大学を出た青年が、学問をして得た教養を生活の方便として役立たすことができず、だが生きていくために仕方なく聖職禄をもらえる地方へと赴く、という姿が描かれている。そしてこの「ある田舎の村」は1646年に詩人が聖職禄をもらうことになるアインホウであろう。これは最終連の最終行に“Ay, Ay, 'tis thither will I go.”「アイ、アイ、そこへ私は行くのだ」との言葉によって想定できる。もちろん“Ay”は「ああ」或いは「はい」の意味で使われるが、ここでは言葉の語呂合わせでアインホウ(Aynhoe)の“Ay”の部分だけを使ったと考えることができる。[4] 大学を離れた詩人はその田舎でフリースクールの助教師(usher)となったが、本人はそれを「年季奉公」といった表現で示しており、自分の進路にポジティブな印象を持っていないことは明らかである。

その後、ワイルドは1646年に聖職禄を授与されたアインホウに王政復古まで住んでいたが、1662年、礼拝統一法(Uniformity Act)によって聖職禄を失うことになる。引退後は同じノースハンプトンシャのOundleに住み、1679年その地で没した。[5]

Ⅱ. 詩人としてのワイルド

ワイルドの作品は当初ブロードサイド、つまり片面刷りの大判の紙で出されていた。詩集のエディターであるジョン・ハント(John Hunt)が書いた伝記によれば、本でなく、“sheets”、綴じていない状態の紙に印刷されていた。[6] 著作の中でも1660年の“Iter Boreale”は当時注目を集め、特に有名になった作品である。時事的な要素で構成され、王政復古の立役者ともいえるジョージ・マンク将軍(George Monck)の活躍を祝うこの作品の内容はタイムリーとも言えるものであった。大変な人気を博したというが、ジョン・ドライデン(John Dryden)は、そのワイルドの人気について辛口で触れており、一方、サミュエル・ピープス

(Samuel Pepys)はワイルドのファンであった。[7]

ブロードサイドで出されていたワイルドの詩は、1670年に1巻に収められたということであるが、詩集について言えば、17世紀以降は1870年に編集されている。このエディションは正式には*Poems by Robert Wilde, D.D., One of the Ejected Ministers of 1662*『1662年に聖職から追放された牧師の一人であるロバート・ワイルド神学博士の詩集』というタイトルになっている。聖職者であるジョン・ハントが伝記的要素を含んだ序文と数えるほどの注をつけたものである。注は主に歴史的或いは伝記的説明になっていて、詩集はリード・アダムズというセントアイヴズの教区委員に献呈されている。それ以降の新しいエディションはないようであるが、作品も少ないためかほとんど注目を集めてこなかったと思われる。

現在でもかろうじて詩人の名前と作品のタイトルが言及されるのは次の二つの場合であろう。ひとつは"cock-fighting"、闘鶏について歌った作品で、"The Norfolk and Wisbeach Cock-fight"「ノーフォークとウィズビーチの闘鶏」である。その作品全104行はチャールズ・コットン(Charles Cotton)の1674年の著作*The Complete Gamester*(『遊戯大全』)に引用されている。*The Complete Gamester*は、アイザック・ウォルトン(Izaak Walton)の*The Compleat Angler*(『釣魚大全』1653)との関連で言及されることもある作品であり、そこに全文が引用された故に「ノーフォークとウィズビーチの闘鶏」は世に残ったと言えるかもしれない。この作品は王政復古期に人気のあった娯楽を記している一方で、当時のイギリス人の自然観を示す記録としても考えることができる。[8]

もうひとつ、17世紀英詩のアンソロジーに取り上げられている作品がある。アラステア・ファウラー(Alastair Fowler)が編集した17世紀詩のアンソロジー*Seventeenth-Century Verse*(Oxford UP, 1991)の中には、ただ1篇であるがワイルドによる"An Epitaph on Some Bottles of Sack and Claret Laid in Sand"「砂の中に置かれたサックとクラレットの瓶についての碑文」という作品が収められている。ファウラーのエディションが用いたテクストは、1656年出版の*Parnassus Biceps*という詩集の1927年版で、ワイルド個人の詩集ではないと思われる。1870年版のワイルドの詩集に収められた同じ作品と比較すると、言葉もところどころ異なっている。ただ、ワイルドの作品は全般的に執筆年代がわかりにくいが、この作品については1656年出版の詩集に掲載されているため、王政復古を迎える前の時点でこの作品が書かれ、人々の目にふれていたことがわかる。

Ⅲ. 作品の分類

ワイルド個人の詩集に注目してみると、1870年版詩集には33篇ほどの作品が収められている。同時代の聖職者詩人が好んで書いた宗教詩や恋愛詩とも幾分異なる様々なタイプの詩がある。作品は大きく4つに分類することができよう。

まず、第1のグループは歴史的な事件、事実を扱う作品群である。たとえば、1659年にマンク将軍がスコットランドからロンドンへ南下する道中を、王政復古を迎えるまでの経緯を含めてエピック調でうたった"Iter Boreale"「北の旅路」がある。また、ラブ・プロットと言われる一種の王政復古計画の失敗により、1651年に処刑された聖職者クリストファー・ラブについてドラマ仕立てで書いた作品、"The Tragedy of Christopher Love, Late Minister of the Gospel, Acted Upon Tower Hill, August 22nd, 1651"「1651年8月22日、タワー・ヒルで処刑された今は亡き福音の牧師、クリストファー・ラブの悲劇」がある。ただし、これは1651年の出来事を扱っているものの、執筆時期は1660年頃とされている。

次のグループとしては、"nonconformist"、非国教徒として自分自身の立場を明らかにする作品群が挙げられよう。例えば、礼拝統一法で職を追われた後、経済的支援を受けた相手に対して"The Grateful Nonconformist; Or, Return of Thanks to Sir J.B. Knight, who sent the Author Ten Crowns, 1665"「感謝に満ちた非国教徒、あるいは1665年、著者に10クラウンを贈ったナイト氏への返礼」という作品、また、1666年の作品で、"The Loyal Nonconformist; or, an Account of what he dare swear, and what he dare not swear"「忠実な非国教徒もしくは彼が確信するものとそうでないものの説明」がある。後者においては、国王を支持することは明らかに示し、その一方で国教会への批判をしている。詩人は国王は神がイギリスのために選び出した存在であると言い、自分の"conscience"、良心が「ノー」と言わない限りは王の命令に従うと宣言している。一方教会につい

ては特に“archdeacon”(大執事)、“dean”(参事会首席司祭)、“chapter”(聖堂参事会)などといった教会上層部に対する反発や不信感を顕にしている。これなどはロイヤリストでありピューリタンであるワイルドの立場、心境が克明に描かれた作品と言える。

次に分類されるのは、交友関係を示すエレジーやエピタフである。詩人が聖職者であったことも手伝ってか、亡くなった友人や知人に或いはその家族に書いた作品は多い。歴史上名を残した有名人に宛てたものと言うよりはむしろ、おそらく親しくしていた男性に対して、彼の亡き娘に捧げる詩を書いたものや、あるいは尊敬する長老派の先輩聖職者に向けた追悼の詩などが挙げられる。たとえば、長老派牧師のヴァインズ氏の死を悼む作品では、彼がいなくなってしまい途方にくれる様子で、軍隊のイメージを使って、指揮官や騎手が死んでしまったら、歩兵は逃げるしかないと言っている。また、大変に相手をいとおしく思っている様子で、輪廻転生があるならば、この地上のどこで今あなたを見つけられるか教えて欲しい、との願いを切実に表現している。エレジーやエピタフには誰に宛てたのかは不明である作品もあり、また、誰にも宛てていないと思われる作品も含まれている。

これまでの3つの分類に含まれないものには一種のサタイアと言える作品群がある。例えば闘鶏のことを歌った“The Norfolk and Wisbeach Cockfight”や、“A Poem upon the Imprisonment of Mr. Calamy in Newgate”「カラミー氏のニューゲイト幽閉についての詩」などがある。後者は長老派の牧師に宛てて、投獄を祝福するもので、刑務所にいるカラミー氏のほうが礼拝統一法によって家も収入も失った者たちよりも恵まれているといったパラドクスを使っている。

Ⅳ. “Iter Boreale”について

次にワイルドの作品から特に1650年代から王政復古にかけての時代を記録した“Iter Boreale”を具体的に取り上げたい。まず、“Iter Boreale”は直訳すると“northern journey”、「北の旅路」ということになろう。実際には北つまりスコットランドから南ロンドンへの移動を指す。スコットランド駐留軍の司令官ジョージ・マンク将軍はチャールズⅡ世を亡命先から呼び戻し王政復古を迎えた立役者であった。詩的題材にはふさわしい出来事であり人物と言える。そもそも長老派であったワイルドは王政復古を好ましくとらえており、この作品ではマンクを高く評価して称えている。

作品は全部で16のスタンザ(或いはセクション)に分かれている。それぞれ長さは異なるもののすべてカプレットで書かれている。まず、第1連では、暗い夜が明けて、つまりイギリスの時代が変わり、詩人もペンを執ることを再び決意したと書かれる。

The day is broke! Melpomene, begone;
Hag of my fancy, let me now alone:
Nightmare my soul no more; go take thy flight
Where traitors' ghosts keep an eternal night;
.....
Go make thyself away, -- thou shalt no more
Choke up my Standish with the blood and gore
Of English tragedies: I now will choose
The merriest of the nine to be my muse:
And come what will, I'll scribble once again;

1640年代の革命期以来、イングランドでは血なまぐさい出来事が続いており、その間詩人は明るい気持ちで詩を書くということはできなかった。それは悲劇の詩神メルポメネが君臨する暗黒の時代であった。それがようやく王政復古の兆によって時代の変化が予告され、明るい詩神のもと詩人も再び筆を執る意欲が溢れてきたことが表現されている。[9] この第1連においては1660年の祝賀ムードが示唆されているが、詩人にとっても、それまでとは全く異なった喜ばしい時代の幕開けを意味している。

第2連においては歴史上有名な人物の名前が挙げられる。チャールズI世、ジョージ・マンク、そしてジョン・ランバート(John Lambert)である。チャールズは、争う3人の子達つまりイングランド、スコットランド、アイルランドをなだめ、争いをやめさせようとしたが、結局は殺されてしまった「イギリスの父」として描かれている。マンクは、闇に包まれていたイギリスに再び朝の、日の光をもたらしてくれた人とされ、そしてランバートは、マンクが撃退した「暴君」となっている。このジョン・ランバートは革命以降クロムウェルの側近であったものの、1657年、彼に王号

を与える案に反対して失脚していた。クロムウェルの死後、1658年に政界に戻り、リチャード・クロムウェルの辞職後、1659年に国政を支配した人物でのちにマンクと対立している。作品にはこのような面々が登場しているが、ただ第2連でも詩人の執筆意欲に関する記述が半分ほどを占めている。革命期から王政復古までの時期に、詩人としてよほどの苛立ちを感じていたに違いない。ここではマンクの登場までは詩作を進んで行わなかった、と言っている。

I that have only dared to whisper verses,
And drop a tear, by stealth, on loyal hearses;
I that enraged at the times and Rump,
Had gnawed my goose-quill to the very stump,
And flung that in the fire, no more to write,
But to sit down poor Britain's Heraclite.

「私はただ、詩をこっそりと囁くことしかできず、高潔な棺にひっそりと涙していた」という部分からは、様々な人の処刑が行われた共和制時代には他人の死をいたむ気持ちがあっても、その哀悼の詩さえワイルドは自由に書けずその気持ちを抑えてきたことが推察できる。つまりマンクがもたらした変化のおかげでイギリスは夜明けを迎え、それはワイルドにとっても詩人としての夜明けを意味したのであろう。

第3連ではクロムウェルに言及している。オリヴァー・クロムウェルの死後、1658年息子のリチャード・クロムウェルが護国卿となったが、軍隊と議会との板ばさみになり、統制を取ることはできず、あっという間にワイルドの言葉で言えば「7年間のバベルの塔が崩れ去」ってしまった。ここでランバートの出番がやってくるが、それは天下を取るための一種のハンティングであった。ランバートはハンティングの責任者である“Master of Hounds”として、「よき古き大義」、“the Good Old Cause”という名の獲物を放し、猟犬を使ってハンティングを行うという役どころになっている。“Good old cause”とは革命初期オリヴァー・クロムウェルが活躍した頃から叫ばれたことであったが、1659年のこの段階に至っては、いわば軍隊の不満を集約して示しているものであった。

第4連からはランバートが暗躍する混迷期のイギリスの様子を描かれる。イングランドは病気を患う女性に喩えられ、国内は銃撃や砲撃の音が響いている。苦しみ、助けを求めて祖国が悲鳴をあげる様子は以下のように描かれている。

Sick, as her heart can hold, the nation lies,
Filling each corner with her hideous cries:
Sometimes rage, like a burning fever, heats,
Anon despair brings cold and clammy sweats;
She cannot sleep - or if she doth she dreams
Of rapes, thefts, burnings, blood, and direful themes;
Tosses from side to side, then by-and-by
Her feet are laid there where the head did lie:
None can come to her but bold empirics,
Who never meant to cure her, but try tricks;
Those very doctors who should give her ease -
God help the patient! - was the worst disease.

イングランドは病に伏しているのだが、病気を治療する医師がいないのである。「病人を楽にさせてやるべき医者が／なんと一番の厄介な病気だった」というように、主導権を握ろうとする「やぶ医者」たちが暴れているこの体制のままでは、イギリスがますます衰えていくという危機感が示唆されている。

第9連においてスコットランドにいたマンク将軍の動きが始まる。作品では北風の神ボレアスの息吹とともにマンクは活動を開始するが、歴史的な経過としては1659年10月に彼は正式に議会の自由と権威の回復を求めている。その動きに対応しランバートはマンク将軍のロンドン入りを阻止するためにイングランド北部ニューカースル方面へ移動している。それぞれの部隊のサイズを比較すればランバートのほうがはるかにマンク将軍の部隊を上回っていた。ところが、ランバートは攻撃をしかけずにむしろ交渉を望み、時間が経過するうちに以前から給与待遇等に不満を持った兵士らが構成する彼の軍は解散してしまったのである。ランバートよりも小さな部隊を率いるマンク将軍の戦い方は以下の部分でも書かれている。

'Twas not his safest course to flame, but choke;
Small fires must not blaze out, lest by their light
They show their weakness, and their foes invite:
But furnaces the stoutest metals melt,

And so did he, by fire not seen, but felt;
Dark-lantern language, and his peep by-play,
Will-o'-wispt Lambert's new lights out of the way.

マンク将軍の部隊は「小さな炎」であり、過激な攻撃を避け、じっくりと相手に打撃を与える方法を取り、実際には戦いを交えずにむしろ頭脳戦で敵に勝ったことが暗示されている。

第10連ではマンク将軍の南下が始まる。スコットランドからの冬の道のりは本来大変厳しいものであるが、天のはからいもあって道が霜で固まり、冬でないかのようなスムーズな道中となったことが書かれる。史実ではマンクがロンドンに着いたのは1660年2月3日のことになる。

第11連からはふたたび残党たちの悪あがきに触れ、そういった問題を解決するマンクについて書かれる。歴史的な経過としては、1659年暮れに復活した残余議会が1660年2月21日に旧長老派議員を迎え、1648年12月のプライドのパージ以前の長期議会へ戻った。そして3月15日、国王を迎えるための新議会召集を決定して解散した。詩人は第11連においてこの3週間の出来事に触れており、旧長老派議員を迎えたこと、新議会設置を決定したことなどが伝えられる。最後の2行の部分では、議会が、不死鳥のように自分の灰から甦るよう整えられたことがわかる。

こういった仕事が済んだ時点で、マンクはイングランドの守護聖人である聖ジョージに喩えられる。ジョージという名前をかけてあるのは言うまでもないが、聖ジョージはドラゴンを退治して王女を救った英雄であり、ジョージ・マンクはランバートが中心となる勢力を破って、病に苦しむ女性に喩えられてきたイングランドをとうとう救出した英雄とされる。

いよいよクライマックスの部分、第14連からの最終3連においては、チャールズⅡ世のイギリスへの帰還、そしてマンク将軍へのガーター勲の授与について示唆される。ただし、時間的に言えば、この作品自体は、それ以前の4月23日、聖ジョージの祝日に出されているため、作品の中ではチャールズⅡ世はまだイギリスに帰っておらず、王政復古もまだもう少し先のこととなる。ただ、詩人はすでにチャールズの帰還を非常に鮮明にイメージしている。それは、2月から3月にかけての議会において、共和制の崩壊が事実上確実となっていたからである。

チャールズⅡ世を迎える喜びを、誇張してユーモラスに描いた部分がある。

The joyful ship shall dance, the sea shall laugh,
And loyal fish their master's health shall quaff:
See how the dolphins crowd and thrust their large
And scaly shoulders to assist the barge;
The peaceful kingfishers are met together
About the deck and prophesy calm weather;
Poor crabs and lobsters have gone down to creep,
And search for pearls and jewels in the deep;
And when they have the booty, crawl before,
And leave them for his welcome to the shore.

海を渡ってイギリスに戻るチャールズⅡ世を歓迎する船や海の生き物の様子は作品の前半とは全く異なる軽快な調子で描かれている。また、ペトラルカ的な誇張もあり、チャールズⅡ世を乗せた船を待ちきれない群衆は喜びの涙で海水の水位を上げようとか、我々は彼の父親、つまりチャールズⅠ世の墓に、泳げるほどの涙を流そうなどといった表現が用いられている。このあたりは王政復古期のエピックというよりもむしろ17世紀初頭の賞賛の詩的な印象が濃くなっている。

全体的には歴史的な記録を収めたものでありながらも、王政復古の兆とそれに伴う期待によって、詩人が再び筆を執ることを決意し、あらゆる抑圧から解放され自由に詩を書くことができるという確信がこの作品の根底に流れている。結末の部分の軽快さ、明るさも「一番陽気な詩神を選ぼう」という詩人の決意の表れに違いない。

Ⅴ. "The Tragedy of Mr. Christopher Love"

次に史実に基づいたもう一編の作品、"The Tragedy of Mr. Christopher Love, Late Minister of the Gospel. Acted upon Tower Hill, August 22nd, 1651"「1651年8月22日タワーヒルで処刑された、今は亡き福音の牧師クリストファー・ラヴの悲劇」について考察したい。クリストファー・ラヴは、1649年から1651年の間、チャールズⅡ世やヘンリエッタ・マリアと極秘に情報交換していたことにより、反逆罪で1651年5月14日逮捕され、ロンドン塔に投獄された。裁判の結果、死刑を免れなくなったが、その日程が何度も変更になっ

て、最終的には本来の予定の1ヶ月先に処刑は延期された。このことにはワイルドも作品で言及している。

DNB ではワイルドがこの作品を書いたのは1660年、“Iter Boreale” とほぼ同時期となっている。しかし内容は実に10年も前の出来事を扱っている。なぜ執筆までに10年の歳月が経過したか不自然であるのは確かだが、これも “Iter Boreale” の中で詩人が繰り返し言っていたこと、つまり、“I that have only dared to whisper verses,/ And drop a tear, by stealth, on loyal hearses”「ひっそりと忠実なる者の棺に涙して、もっぱら小さな声で詩を歌っていた」という経験によるものではないだろうか。

この作品はタイトルどおり戯曲仕立てで、プロローグ、主題、第1幕から第5幕、エピローグによって構成されている。プロローグで詩人はまず「虐殺された君主」チャールズI世に語りかける。

> New from a slaughtered monarch's hearse I come
> A mourner to a martyred prophet's tomb.
> Pardon, great Charles's ghost, my muse had stood
> Yet three years longer, till she'd wept a flood -
> Too mean a sacrifice for royal blood -
> But she must go, heaven does by thunder call
> For her attendance at Love's funeral.
> Forgive, great sir, this sacrilege in me,
> The tenth tear he must have, it is his fee;
> 'Tis due to him, and yet 'tis stolen from thee.

チャールズI世の死後3年を経てワイルドの詩神はラヴの葬儀に参列することになる。チャールズに対する哀悼の意を作品で発表するなど公に示していないにも拘らず、ここでラヴに関する作品を認めることに多少の後ろめたさを感じているのだろう。ピューリタンでありながらもロイヤリストである複雑な自身の心境をここで語っている。また、作品の主題が示されるArgumentの部分では、クロムウェルを大変冷酷な悪人として描き、長老派としては清教徒革命に賛同してはいたものの、チャールズI世の処刑をはじめとするクロムウェルの残虐性を受け入れることは決してできなかったことを明らかにしている。

第1幕の舞台は裁判所である。裁判官は残忍な敵を意味するペリシテ人に喩えられ、ラヴはそのペリシテ人に捕らえられたサムソンに喩えられる。裁判所では裁判を行うというよりも、囚人をいたぶることが目的になっている。ハンティングのように、猟犬が放たれ、ラヴに襲いかかるが、ラヴはその攻撃をかわす。ハンティングのイメージは “Iter Boreale” においてもランバートが猟犬を使って「よき古き大義」を追いまわさせる場面で用いられている。イヌは貪欲に獲物を狙ういやらしい存在で、大変否定的なイメージである。また、ラヴの裁判を傍聴する人たちからはイヌに喩えられた裁判官のほうが反逆者で、囚人であるラヴのほうがむしろ裁判官にふさわしいとの声があがった。

次の第2幕ではラヴに死刑の宣告がなされる。判決文が読まれるとすぐにラヴはその首を垂れるが、この身の構えで彼が断頭を恐れないでいることが明らかになったと詩人は書いている。清教徒詩人のアンドリュー・マーヴェル（Andrew Marvell）がチャールズI世についてやはり立派に断頭台に立ったことを記したが、それと同様にワイルドはラヴの死をも恐れない毅然とした態度を記している。

第3幕で詩人は死刑執行の延期について触れる。死刑の宣告は1651年7月5日のことであり、当初の予定では死刑執行が7月14日であった。しかし実際にラヴが断頭台に上がったのは8月22日に変更された。予定から約40日も遅れてのことであった。ワイルドはこの事実を大変不満げに扱っている。死を恐れないラヴに対して、死刑執行を延期するのは、様々な地上的な誘惑によって彼を試みにあわせるためであった。彼は敵の恫喝などには決してひるまなかったため、今度は仲間からの誘惑を、と敵が企てたのである。友人らは死んではいけない、命乞いをするように、妻や子を思え、と言う。これに対してラヴは非常に辛い思いをするが、しかし最後はすべての地上的誘惑を振り切ってしまう。

第4幕では処刑の場面が描かれる。処刑当日の朝の様子から断頭までのシーンがこの一つのスタンザ、22行に圧縮され記されている。

> The day is come, the prisoner longs to go,
> And chides the lingering sun for tarrying so;
> Which, blushing, seems to answer from the sky,
> That it was loth to see a martyr die.

Methinks I heard beheaded saints above
Call to each other, 'Sirs, make room for Love,'
Who when he came to tread the fatal stage
Which proved his glory, and his enemy's rage,
His blood ne'er run to his heart, Christ's blood was there
Reviving it, his own was all to spare,
Which rising in his cheeks, did seem to say,
'Is this the blood you thirst for? Take it, I pray.'
Spectators in his looks such life did see,
That they appeared more like to die than he.
But oh, his speech! methinks I hear it still;
It ravished friends, and did his enemies kill.
His keener words did their sharp axe exceed,
That made his head, but he their hearts, to bleed;
Which he concluded with soft prayer, and so
The lamb lay down and took the butcher's blow:
His soul makes heaven shine brighter by a star,
And now we're sure there's one St. Christopher.

死を恐れないラヴの毅然とした姿は、マーヴェルが“An Horatian Ode Upon Cromwell's Return from Scotland”の中で書いた、チャールズI世の姿と重なり合う。[10]やはり劇のイメージを用いたその作品で国王チャールズは俳優に喩えられている。また、語彙にも重なる部分がある。「鋭い」という意味の“keener”という言葉であるが、比較級になっているのは処刑に使われる刃の鋭さとの比較による。チャールズは「鋭い眼差し」を断頭台に向けたと詩人マーヴェルは書いている。一方のラヴは「観客」とも解釈できる“spectators”の前でまず心を打つスピーチをし、祈りを捧げ、そして静かに横たわった。チャールズの場合はスピーチの声が兵士らの拍手によって意図的にかき消されたというが、ラヴは「鋭い言葉」をもって立派にスピーチを行った。どちらも敵の刃に勝る鋭さで壮絶な死を遂げたのである。

第5幕においては、この悲劇における役を与えられた天が、その怒りを表現し、敵を恐れさせている様子が描かれる。第4幕で殉教者を見るのを嫌っていた太陽は処刑されたラヴの姿から目をそむけ雲に隠れ、空は掻き曇り、稲妻や雷鳴が続く。詩人はラヴを処刑するに至らしめた者たちを作品の中で名指ししている。そうすることによって、この悲劇との関連を永遠に記録する意図があったかと考えることもできよう。

エピローグには、自分の命を守るため、この作品をラヴと共に葬ってほしいという詩人の願いが書かれている。つまり、反逆者として処刑されたラヴに対するシンパシーを公にするのは都合が悪いことを意味している。共和制の下では亡くなった人々を悼む詩を書いてもこっそり認めるほかなかったという詩人の状況を考慮すれば、ラヴの処刑後まもなくこの詩を書いたものの、公開はできずにしまっておいたのかもしれない。そして約10年間手元においてあったこの作品を新しい自由な時代と詩人が期待した王政復古期に発表した、という可能性は否定できないのである。

むすび

ロバート・ワイルドの作品が王政復古期に大変な人気を博したということが、そして、なぜそのような詩人が、いつのまにかほぼ忘れ去られてしまったのか、疑問は残る。タイムリーな話題は時の経過と共に時代遅れになり飽きられてしまうのは当然であろう。また、広く一般に普及したのは作品が「わかりやすい」或いは別の言い方をすると「大衆的であった」ためかもしれない。ワイルドは聖職者であり神学博士でもあったのだが、教義や信仰心を扱う宗教詩は書いていない。同世代のミルトンと比べたら作品の量もテーマの壮大さも異なっている。しかしながら、ワイルド自身は“Iter Boreale”の最後の部分で、この王政復古を実現させた人物の功績を自分以外の誰が作品におさめ後世に伝えることができるかと言い、詩によってこの記念すべき歴史的瞬間の記録を残すことを詩人としての一種の義務と認識していたことがうかがえる。また、“The subject will excuse the verse, I trow, / The venison's fat, although the crust be dough.”(“Iter Boreale”, I)と宣言しているように、作品の題材について自信を持っていたことは明らかである。

王政復古の兆によって再び執筆に専念した詩人であるが、その作品はイギリスにおける重要な史実を記録したばかりでなく、一長老派聖職者の複雑な事情、心境をも鮮明に残している。1650年代から徐々にクロムウェル政権に不信感を覚え、より自由な信仰を求めて王政復古を切望した。しか

しチャールズⅡ世の即位後まもなく再び宗教的な締め付けを経験し、1662年には聖職禄を失ってしまう。ワイルドはこの様々な時期について作品に書き残し、ピューリタンであると同時にロイヤリストである自身の生涯を綴ったのである。ワイルドこそ今後再評価されるべき17世紀小詩人の一人であることに間違いないであろう。

注

1) ワイルドという名前の綴りには複数あり，1870年版の詩集Poems by Robert Wildeでは“Wilde”であるが*Dictionary of National Biography*では“Wild”もしくは“Wylde”となっている．
2) ワイルドについての伝記的な情報は少ないが，この小論における詩人の伝記的詳細は*DNB*と*Poems*のイントロダクションの部分に負う．
3) テクストはRobert Wilde, *Poems by Robert Wilde*, ed. John Hunt (London, 1870)を使用しており，この小論におけるワイルドの作品の引用はすべてこの詩集からである．
4) Aynhoeに関しては別の折にも語呂合わせを使ったことがある．See *DNB* and *Poems*, p. xvii.
5) *DNB*の記録の中に，ワイルドの遺言についての記述がある．彼は自分の死後，故郷のセント・アイヴズの教会区教会で毎年，聖霊降臨日の2日後の火曜日に説教と6冊の聖書の分配が行われるよう遺言していた．聖書の分配方法が独特であり，聖霊降臨日の日曜日に，火曜日の行事を説明し，聖書が欲しい6名ずつの男女を火曜日の朝9時に集める．そこで聖餐台の上で抽選をする．12人が6冊の聖書をめぐって，3個のさいころをそれぞれ投げて出た数を競い，さいころの目の合計が多い順に聖書を手にすることができた．教会の中で一種賭け事的なことを行うことは冒涜ともみなされ，およそピューリタン的ではない．しかし，1713年ケンブリッジ大学教授で牧師のSimon Ockleyは説教の中でこのやり方を非難する意見が多いことに対して，自分で聖書を買うお金のない人に抽選をさせる別の方法があったら提案して欲しい，と言っている．この遺言はワイルドの死後もしばらくの間続けられ，少なくともOckleyの説教が行なわれた1713年の時点ではまだ行なわれていたことになる．それはワイルドの遺言から約35年後にあたる．
6) *Poems*, p. xiv.
7) *Poems*, p. xv.
8) この作品についてはKeith Thomasが*Man and the Natural World* (Penguin, 1984)の中で言及している．
9) ワイルドはそもそも明るく愉快な性格で，ピューリタンとしては珍しいタイプであった．この個性については以下のエピソードがある．同じピューリタン牧師で長老派のリチャード・バクスター(Richard Baxter)はあるときワイルドがあまりにもひょうきんであるという評判を聞いてそれは職業上まずいと思い，わざわざアインホウを忠告に訪れている．ただ，実際にワイルドの説教を聞いてみると，聖職者としてあまりに魅力ある話し振りであったため，逆に噂を信じてきた自分の愚かさを詫びて帰ったという．*DNB*および*Poems*, pp. xviii-xix参照．
10) “Horatian Ode”, ll. 53-64参照．

(2002年12月2日受理)